

ことば座は...

ことば座は、常世の国の物語りを聾女優の小林幸枝が朗読に乗って手話を基軸とした舞演技に表現していこうと立ち上げた朗読舞劇団です。

「ことば(言葉)」とは、「心を口に繁らす」ことをいいますが、心とは真実、口は表現の手段、葉は紡ぐことをいいます。「ことば座」は、この言葉の原義に基づいて、物語に紡がれてある真実としての未来の夢を「朗読」と「手話を基軸とした舞」という二つの言語によって、自由で自在な舞台表現を創造していきます。ことば座が取り組んでいる朗読舞及び朗読舞劇は、日本の古典芸能である能や人形浄瑠璃をヒントに、語り朗読を手話言語をベースにした舞技で演じるというもので、脚本:演出家の白井啓治が小林幸枝のために創案した石岡に生まれた新しい舞台表現です。

ギター文化館発「常世の国の恋物語百」

聾女優：小林幸枝の魅力は、恋歌を独特のスケール感をもって表現することにあります。

小林幸枝の稀有なスケール感を発掘した脚本・演出家：白井啓治が、八郷のアルハンブラと称されるギター文化館を発信拠点に、常世の国の風景をモチーフとした恋物語百に挑戦しています。

小林幸枝が舞い演じる百の恋物語にはふるさと風のことば絵作家の兼平ちえこさんが、「常世の国の五百相」の挑戦でバックアップしています。また、常世の国の恋物語百への挑戦には、ギター文化館をはじめ、この常世の国に在住されている表現者の方々の応援も頂いております。



ギター文化館の公演は、兼平ちえこ作「常世の国の五百相」に囲まれたなかで行われる。

常世の国は物語の宝庫

ふるさと常世の国は、物語の宝庫です。ことば座では、ふるさと常世の国に伝わる物語を現代の視点で見直すとともに、新たな民話となるべき物語を創作し、朗読劇や朗読舞劇に表現し、ふるさと文化のルネサンスを進めていきたいと考えています。



オカリナアート JOY の野口喜広・矢野恵子さんとのコラボレーション舞台。